

鈴木ゼミ 14-1-191-0084 綿谷 慎吾

1. 研究背景・目的

住宅に設けられた場所や空間には、「リビング」や「ダイニング」「居間」など「室名」が与えられるが、様々な理由から「広間」や「主室」といった独特な室名を使う建築家たちが存在する。この独特な室名に注目し、そこに反映された設計者の思想を分析する。この問題については、過去に伏谷聖子が1952年から1998年までの作品について研究している。本論では、この続きにあたる1999年から2017年までを調べ、その後の「室名」の付け方に変化があるのかどうかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

今回は、1999年から2017年の『住宅特集』に掲載の住宅計3335件中、独特な室名を使用している773件のプランに記載された室名を対象とする。

3. 住宅プランに見る「室名」の変遷の分析

大阪大学の伏谷聖子(1999)は、1952年から1984年の「新建築」、1985年から1998年の「住宅特集」に掲載の住宅計3407件のプランに記載された室名を対象とし、[公室系]と[私室系]に分けて「室名」の変遷に注目し、そこに反映された設計者の思想や方法論を分析している。

4. 新しい「室名」の起源

「広間」は、1956年に篠原一男の独自の解釈により抽象的空間を表す「室名」として使用された。その後1975年まで篠原が「広間」をほとんど単独で使用していた。

「主室」は、1976年に坂本一成の《代田の町屋》で抽象的な「室名」として使用された。「主室」を90年代以降増加傾向にある。

5. 「室名」の種類

対象とする「室名」ごとに7つのグループに分け、使用数を表1に示した。伏谷の論文では「新しい動向」として注目されていた「室」が、対象の「室名」の中で最多の使用回数に達した。また伏谷の論文では注目されていなかった「家族室」系の「室名」は、3番目に多く使用されている。

系統	種類	使用数
広間系	広間 大広間 ヒロマ ホール サロンなど	163
主室系	主室 副室	62
室系	室 ルーム room ROOM Room 部屋	286
家族系	家族室 家族space ファミールーム ファミールールなど	104
スペース系	スペース SPACE space Space 大空間	60
間系	北の間 中の間 一の間 食の間など	29
その他の室名	私室 公室 フロア 居場所 大きな部屋など	69

表1 「室名」種類別使用数リスト

6. 「室名」の動向

1990年頃から増加傾向にあった「広間」は、1999年以降1年あたり5~10件で推移を続け、19年間で163件116人に使用されているものの、2006年から2017年まで10件を超えた年はない。

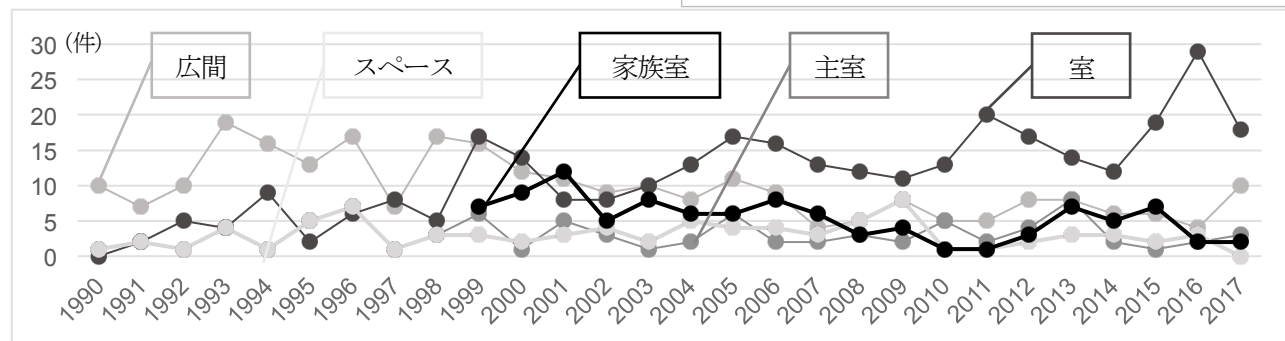
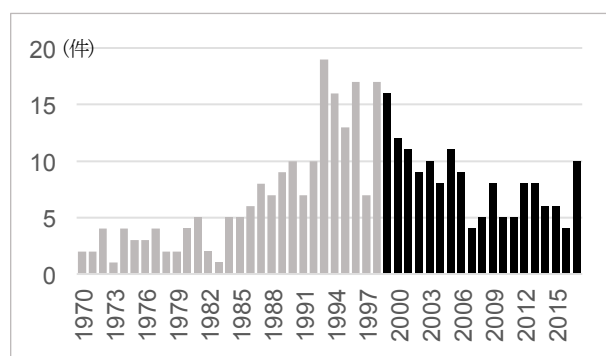


図2 「室名」別使用回数グラフ

「主室」は90年頃から使用され続け2017年まで途絶えることなく使用されている。19年間で62件32人に使用され、この「室名」は定着したといえる。

「スペース」は90年頃から使用され続け2016年まで途絶えることはなかったが、2017年で0件になった。19年間で60件45人に使用されている。

90年代に入って見られるようになった「室」は、「ルーム」としても使用されるようになり増加を続け、19年間で286件169人に使用されている。

また新たに「家族室」や「ファミリールーム」のような家族の集まる場としての「室名」が使用されるようになる。19年間で104件60人に使用されている。

さらに「間」という「室名」が使用されるようになる。従来使用されていた「板の間」などではなく、例えば部屋の方位（北か南か、中か奥か等）や高さ（上か下か、1階か2階か等）、行動（食や寝等）を表すような使い方をしている「室名」をとりあげた。19年間で29件15人に使用されている。

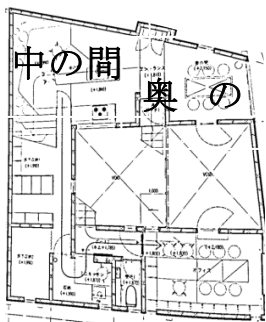
7. 注目する建築家

岸本和彦と竹原義二の2人の建築家に注目した。

岸本は作品の中に「間」や「居場所」といった「室名」を使用し、作品の中で『生活において場所を選び取るという行為がそれぞれに設けられた設備、あるいは抽象的概念（リビングやダイニングといった名称）で決定されるべきではない。』と述べている。多くの作品でこの考え方が「室名」となって反映されている。住む人間が場所を選び取るポイントに「方位」や「高さ」、「部屋の大きさ」、「部屋の位置」等があるが、それをわかりやすく「室名」に反映している。

作品1) 「中の間・奥の間」 岸本和彦

本来建築は機能で説明されるべきではなく、選択可能な多様性に満ちた空間の質が人を内包する大らかさが求められている。その考え方は移住空間へも引き継がれ、螺旋を描くように上昇する過程において、段差と空間プロポーション、明と暗が相対的に変化しながら、居場所が展開する。



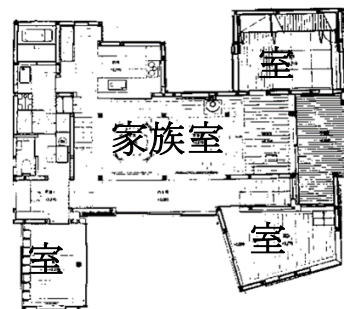
『Casa さかのうえ』(住宅特集 3/2014)

伏谷の論文では、竹原は「主室」を使用する建築家として書かれているが、1999年以降「主室」使用したのは2作品だけである。「主室」に代わり「家族室」という「室名」を26作品で使用している。

住む人間が生活の中で空間を選び取れるように「室名」

作品2) 「家族室」 竹原義二

どれが誰の部屋でもない。どの部屋も外部空間と自在に繋がり、転げたり走り回ったり、座ったり飛んだり、そこにはいつも違った見え方や繋がり方がある。まさに自由であること。



『鶴の里の家』(住宅特集 7/2017)

に機能的な意味を込めていない。それぞれの居場所を決めず、「景色」や「日照」、「材質」等から使用するタイミングによって住む人間が空間を選び取ることができる。

8. 結論

「広間」は定着し、多くの建築家に使用されているが、2000年以降減少傾向にある。

「主室」は1年あたりの使用件数は少数だが、使用されなかった年はなく定着している。

「家族室」は「リビング」「ダイニング」等の代わりとして家族の空間という意味で使用され定着している。また新たな動きとして、家族が集まるプライベートな空間として使用する作品が見られるようになった。

「間」「室」「スペース」は、ほとんど同じ意味で使用され、変化に応じて対応できる抽象的な空間として住宅のほとんどの空間に使用される。設計者が空間の使い方を決めるのではなく、住む人間が生活の中の「行為」や「時間」等から適した空間を選び取るための「室名」である。

しかし、「間」は様々なバリエーションが存在し、ひとつの住宅の中にも「中の間」「奥の間」等、抽象的ではあるがそれぞれ「室名」によって違いを出すことができる。

「参考文献」

- 伏谷聖子「住宅プランに見る「室名」の変遷」日本建築学会近畿支部研究報告集, 1999
- 「新建築住宅特集」新建築社, 1999-2017
- 「新建築住宅特集」別冊 新建築社, 2004
- 篠原一男「住宅論」SD 選書 鹿島出版会, 1970